昨年秋から勉強していた「夏目漱石」作品購読が、4 月上旬で終了した。それに取りかかる前にはフランス語とイタリア語の歌に浸っていたので、日本文学に入った途端、私の脳はタイムマシンで時空を超えたような衝撃を受けて明治時代に突入した。そして漱石作品と並行して、弟子の物理学者「寺田寅彦」の随筆も読み始めたから大変。頭はすっかり「日露戦争時下の明治時代」である。実はその間、フランス語を「見る」のがものすごく苦手になった。「困ったなあ」このまま脳がフランス語を拒否したらどうしよう。しかし漱石は英文学教師でありながら、フランス語もラテン語も解す。どうやらゲルマン系とラテン系の言語共存は不可能ではないらしい。実は英語の苦手な私も、漱石が書いた英文を訳し始めたら、以前よりは少し速く訳せるようになった。慣れることが大事かもしれない。とりあえずフランス語を完全拒否しないように意識して抵抗していたのだが、何のことはない。日本文学の勉強が終わったら、フランス語に触れることに抵抗がなくなった。それどころか前より訳が速くなった。そしてちょっとした変化が現れた。3 冊ぐらいの本を並行して読めるのである。そして訳詩を作ってから対訳しているのである。要するに気楽に頭を使えばよいのか。

まず気分が乗ったら、CD をかけながら音に言葉を乗せる。耳に聞こえる単語と訳の言葉の位置がそんなに離れていないことがわかる。でもそれから日本語で発音がおかしくなるところは別の言葉に置き換えるので、そこでひと苦労する。時にはできた詩をそっくり入れ替えることもある。かつて田中朗さんが、亀井繁男さんのホームページにリンクしていた文章に「La mer」の「海」が「膿」に聞こえるという話があり、また太田光弘さんがユーモアで「黒い鷲」を「黒イワシ」「黒い和紙」と言ったのが、猛烈に記憶に残っているので、発音には極力気をつける。それで何とか訳詩を作る。

でもここで問題になるのは訳詩ができてから対訳を行うこと。つまりフィーリングが先行していること。プロの訳者の訳を見ていて「熟語をモロ単語で訳しているな」と思ったことが幾度かあるが、それはフランス語堪能ゆえのことだと思う。言葉の訳として正しくても、詩の訳としてちょっとニュアンスが違うことがある。今回のように訳詩を作ってから、原文を見ながら対訳を行ってみると、微妙なニュアンスの違いで解釈が大幅にずれてしまうことに気がついた。そこで留意する。たとえその文章を見た段階で「訳せた」と思ってもしつこく辞書を引くこと。すると前の行との関わりで、もう一方の訳を選択しなければならないことを発見する。もちろん単純に訳して「正解」で終わることもある。でも時に意味の追及をしなければならないものは難しい文ではなくて、単純な一文であることが多い。そこが落とし穴である。

私には「努力」について今も心に残る出来事がある。それは中学時代、小さかった私は身長を伸ばす目的でバレーボール部に入った。「バレーボールが心底好き」という足の悪いクラスメートも一緒に入った。休日に自宅へ遊びに行くと、彼女は壁を相手に繰り返しレシーブの練習をしていた。一緒に遊びに行った数人は最初付き合ったが、すぐに飽きてしまい別の遊びを始めた。しかし彼女はなかなか諦めなかった。「まだまだ」そのうち月日が過ぎたとき、彼女は誰よりも基礎がうまくなっていた。

大事なのは「甘く見ない」こと。少しくらいできるようになったからといって安心してはいけない。「簡単だ」と思う時、私はいつも彼女の姿を思い出す。(2012.4.21)